

---

# サイダー

そあ。。

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

サイダー

### 【ZPDF】

Z8303M

### 【作者名】

そあ。。。

### 【あらすじ】

退屈な日常を送る中学生が出会う非日常。

少年は彼女に出会い、変わってゆく。

夏の初めの、ちょっと切ない物語。

(前書き)

初投稿です。

文章力はまだまだ未熟ですが、お付き合い頂けると幸いです。

・・・熱い。

焼けるような太陽の日差しを背中に受けつつ、僕は歩いていた。  
日差しとアスファルトからの照り返しで、体中の水分が全て取られてしまいそうだ。

季節は夏。

七月の中じる、夏の本番を告げるような曇下がり。

退屈な授業を終え、真っ先に鞄を掴むと校舎から出て帰路につく。  
部活には入っていない。

僕は運動が苦手だ。体育の授業の成績なんてのはいつも1。  
これで勉強が得意、とかだったらまだしも勉強も得意という訳でもなく、中の上程度だ。

交友関係についても、良好とは言い難い。

基本的に休み時間などは寝ていたりするし、自分から積極的にクラスメイトに話しかけるなんて事はしないので、友達も片手で数える程しかいない、最も、向こうは友達と思っているかは分からないが。僕は根暗で、運動音痴で、社交性に欠ける。要は駄目人間だ。  
僕は自分の事があまり好きではない。

今の日常は退屈だが特に問題はない、毎日毎日同じ動作を行つてループするだけ。

それで飽きないのかと聞かれれば返答には詰まる・・・が答えはYESとなってしまう。

退屈しつつも、そこを苦とすることはなく、日々をやり過ごす。

そんな僕は今日もまた、機械仕掛けのよつ一日を送る。

放課後の校庭からは、部活動に勤しむ生徒たちの声が聞こえてくる。それを横目に見つつ校舎から抜け出すと、ちょっとした山道にはいつた。

さて、あそこで一休みしていこう。

校舎から歩いて十分、山道を登りきったところにベンチが一つと小さな自販機がある。

そこで買える五十円のサイダーを買い、喉を潤すのが僕の日課というか習慣だ。

ガランパロン…と自販機が壊れてしまいそろな程の音に、もう慣れたもの。

青い下地に黒でサイダーと書かれているだけのそれを開けると、一気に飲み干す。

「んくっ・・・ハア」

砂糖水を炭酸で割ったような安直な甘みが口の中を支配していく。値段が値段なので文句は言えないがお世辞にも美味しいとは言えない代物だ。

しかし、ふと飲みたくなってしまう。

そんな不思議な味なのだ。

一息つくとベンチに腰掛け、街を見下ろす。

左側には学校があり、後は畠が広がっている。

住宅はここの中調度裏側に広がっているので、目の前には畠と出しか見えない。

ここからの景色は中々に心地よいものであり、加えて人気が全くないといふことも重なって、僕はこの場所が好きだ。

朝起きて、学校に行き、ここで休み、家に帰り、寝る。

傍から見たらつまらないと思われるかもしれないが、中々、悪くはない。

それだけの毎日が続いていく。誰だってそう思うだろうし、僕だって例外ではない。

そう思っていたんだ。

偶然とは、予測せずに起ころるから偶然なのだ。

不意に、突然にやつてくるから偶然であり

・・・それは、突然訪れた。

「こんちは」

背後から、耳に入り込んでくるような、透明感のある声を聞いた  
「ふあつ！！」

中学校に入つて一年と少し。

一度もこの場所で人と会つたことはない、それ故に驚きは隠せなかつた。

「驚かせた？『ごめんなさい』

声につられて振り向くと、一人の女性がたつていた。

――綺麗だ。

美人というのはこんな人の事を言うんだと思った。

158cmの僕より5cm以上は高い身長とスラッシュ伸びた手足。  
肩までかかる黒髪は、艶やかで真っ直ぐに伸びている。  
恐らくは高校生であろう、その制服には見覚えがある。  
袖から見えるその肌は病的なまでに白い。

整った顔からはどこか理知的な雰囲気が醸し出されている。  
完璧を体で表したような美人が、そこには居た。

「・・・なに？」

あまりにも長く凝視していたからだろう、彼女は少し困ったような  
風に首をかしげて聞いてくる。

まずい、早く視線を逸らさなければ。

「ごつ、ごめんなさいっ！」

慌てて視線を逸らすと、訂正の言葉延べ、俯く。

自分でも耳まで赤くなるのが分かつた。

「フフ・・・隣いい？」

こちらの心の中を見透かしたように、彼女は微かな微笑みを浮かべ  
ていた。

心臓が脈打ち、バウンドするように鼓動する。

「え？！あ、はいっ！」

落ちつかないまま、口をつけた言葉はとてもおぼつかない物だった。  
再度、赤面してしまう。

「じゃあ、失礼するね」

そう言つて僕の隣に腰掛けた彼女からは香水だらうか、皮を剥いていない八朔のような、甘酸っぱくもどこか苦い。そんな匂いがしてきた。

トクンと心臓が跳ねる。僕の十三年の人生の中で母親や親族以外の異性と喋ることはあまりなかつたようだ。

僕はこういう状況に慣れていないし、ましてや一人きり、なんていふのは尚更だ。

僕の座つているベンチはあまり大きい物ではなく密着とまではいかないものの、自然と距離は近くなつてしまつ。

・・・まずい、どうにかしてこの状況を抜け出さなければ。

チラリと、彼女の方を向く。

・・・目が合つた。しかし無言のままである。

「何？」

この沈黙に痺れを切らした彼女が聞いてくる。

初対面の中学生に顔をまじまじと見つめられたら、疑問に思つのは当然だろう。

「いやつ、あの・・・その、えつと」

しまつた。何も考えずに喋りだしたのはいいものの、答えは用意していない。

突然、彼女がクスッとほんの少しではあるが笑つた。

「少年。もしかして、緊張してる？」

図星だ。

といふか今の僕の態度を見ていれば分かるのも当然だ。

「え、あ、はい」

ここにきてやつと、僕は意思を示した気がする。

「女の子と一緒に居るのは苦手？」

「あまりそういう機会がないんです」

よし、喋れた。緊張がすこし緩み、落ち着く。

段々と落ち着いていくと共に、相手を觀察する余裕ができていた。

背筋をピンと伸ばし膝に手を置いた凜とした姿勢には、どこか気品

のようなものが見て取れる。

常人とはどこか違う佇まいに、僅かな気後れさえ感じてしまう。

「あれ？君、そのサイダー好きなの？」

ふと、僕が手にしていたサイダーの缶を指差して問う。

「ええ、まあ」

とつさに口を出た答えはひどく曖昧なものだったが、それを肯定と受け取ったんだろう、彼女は目を輝かせつつ言つ。

「本当？！それ、私も好きなの！友達に勧めても中々分かつてもらえないくてねっ！」

しまった。こんな所で食いつかれるとは思いもしなかった。先ほどの静かなイメージとは打って変わり、急に態度が変わったのですこしうるたえてしまつ。

「その砂糖っぽい甘さがいいと思わない？」

すこし落ち着いたのか、口調は幾分落ち着いたが、彼女は興奮冷めやらぬままに言葉を発している。

兎に角。

やつと話題が見つかったのだ。

これに乗らない手はないだらつ。

「ですね、僕もそう思います」

「でしょーうー！」

少しげこちない愛想笑いになつてしまつたが、彼女は気づいていいようだ。

「私もよく買つてるの。・・・んづ」

少し氣だるそうに立ち上がると、ベンチの真横に位置する自動販売機へと歩いていく。

そちらへ、視線を向けることなくぼんやりと街を眺める。ガラン「ロン！」という自販機の悲鳴のような音と共に、彼女は手にサイダーを一本持つて戻ってくる。

一本も飲むのだろうか、と考えていると片方を僕に渡す。

「はー！」

彼女の笑顔に押されてか、それを手にとってしまう。  
「ありがとうございます。」

素直に感謝の意を伝えると、満足したように頷く。  
心なしか表情が緩んでいるように見える。

よく分からない人だ。

だが、嫌な印象は微塵も受けないので羨ましい。  
プシュッ。

とサイダーを開けた後、彼女はゆっくりとそれを飲む。  
自分は味わうほどに美味しくは思えないのだが、とてもいい表情で  
飲んでいるのを見たら、つられて缶を開けてしまう。

「んくっ」

一口飲むと、口の中にはやはり砂糖水のような安直な甘みが広がる。  
やつぱり、僕はお世辞にも美味しいとは思えなかつた。

暫く、彼女のペースに合わせつつゆっくりとサイダーを飲む。  
このベンチは木陰になっている為、暑さは余り感じない。  
時折吹く風を涼しく思える程だ。

静かに、時が流れていく。

それを特にどうする訳でもなく、僕はただ街を見下ろしつつ一定の  
間隔でサイダーを流し込む。

・・・どれくらい、そうしていただろうか。

恐らく、十分やそこらではあるが、僕にはとても永く感じられた。

「じゃあ、私そろそろ帰るわね」

すっかり、彼女は元の調子に戻っているようだ。

「はい、それでは」

「ばいばい」

簡単に言葉を交わすと、彼女は、これまた背筋をピンと伸ばして歩  
いていく。

やはり、その背中から『気品』のようなものが感じられ、すこし、お  
かしな人だと思う。

姿が見えなくなり、一息つくと立ち上がる。

手に持つてゐるサイダーの缶から僅かに重みを感じる。

僕の、何も変わらない日常。

そこに突如生じた非日常。

悪くない・・・な。

ふと、自分の頬が緩んでいることに気がつく。

うん、悪くない。

また、会えないものかと少し期待してしまつまどじい。

「んぐつ」

いつもと変わらない景色を眺めつつ、サイダーを流し込む。少しだけ、この味が好きになつた気がした。

翌日から、ちょっとだけ僕の日常は変化する事になる。その日も僕は、いつもの様にベンチに座つていた。

「やあ、少年」

聞き覚えのある声を背後から聴いた。

反射的に振り向くと、やはり、そこには彼女がいたのだった。

「また会つたね。少年」

二度目の邂逅だが、今回は偶然と言つわけではなく時間があつたから來たらしい。

・・そんな事が2、3回と続き、度々ここで顔を合わせることになつた。

毎日といつ訳ではないが、少し世間話をして、サイダーを飲んで帰る。

そんな日が数日続いた。

つい先日、彼女に聞いてみた事がある。

それは、どうしてここに来るようになったのか、だ。

僕は一年以上もここに通つてゐるわけで、今まで一度も彼女と会つたことはなかつた。

一瞬、僕に会いに。なんて馬鹿らしい考えも思い浮かんだが直ぐにやめた。

何を期待してゐるんだか、全く。

そして、返ってきた答えはシンプルなものだった。

彼女は真剣な顔つきで、こう言った。

だって、面白いじゃない。こうこうの。

ああ、と直ぐに納得した自分が居たことを覚えている。

僕にとって退屈な日常の中に突如現れた、非日常。

彼女にも、不思議な出来事だったんだろう。

その非日常を、彼女はすこしだけ追つてみたくなったのだ。

それをすこし羨ましいと僕は思った。

理由は単純で、僕はそれを追いかけようと、手を伸ばそうとは考えられなかつた。

明日からは今までの毎日に戻ると考えたら少しばかりの未練はあつたが、結局そこで満足してしまふのが僕なのだ。

ちょっとした自己嫌悪。まあよくあることだ。

そんなこと考えている内に、今日もこの場所へ辿り着く。

「暑つついなあ

思わず声に出してしまつぼビ、今日は熱かつた。

更に、湿度も高いのだろうか、蒸し熱いと来ている。

今朝のニュースをみた限りでは、気温は35度まで上がるらしい。

ここまで来れば割りと涼しいのだが、片道10分の道のりは中々にキツイものがある。

ベンチに腰掛け一息つくと、否応にも首筋や背中から汗の嫌な感触が伝わってくる。

・・・タオルでも持つて来れば良かつた。

取り敢えず、サイダーでも飲もう。

そう思った矢先、やはり背後から透き通るような声が耳に入つてくる。

「やあ、少年」

珍しい、彼女はいつも僕より15分は遅いのに。

「あ、私が奢るよ

毎回、彼女と会う前に僕はサイダー一本を飲みきつている。

彼女は来るたびにサイダーを一本買<sup>い</sup>、僕に渡す。

申し訳ないと思つ反面、気遣いを無碍にしたくはない。

そんな訳で毎回貰つてしまつてしているのだが。

「ありがとうございます」

中学生の僕にとつてはありがたい話だ。

素直に受け取らせてもらひ。

「はい」

缶を受け取ると、すぐさまプルトップ引つ張り、一口飲む。

「くすっ」

そんな様子がおかしかったのか、彼女は小さく笑う。

・・・少し、いやかなり恥ずかしい。

「喉、渴くよね」

顔を赤くした僕を気遣つたのだろう。

余計に恥ずかしい。

「はい、今日はいつもまして暑いので余計に渴きます」

「35度まで上がるんだつけ、朝のニュースで見た」

「しかも湿度が高いですね」

等と、いつものように世間話を始める。

いつもの様に、本当に他愛もない会話。

不思議とそれは、心地よいものであり、まだ数回のことなのに、それが当たり前の様に感じた。

そんな中、やはり変化が訪れる。  
やはり唐突に、なんの前触れもなく。  
ふと、彼女が切り出した。

「私ね、変な子でしょ。学校では物静かな女の子って感じで通しているのに、少し興奮すると性格が変わっちゃうの。でもね、どっちの自分も偽つてゐる訳じやないの・・・」

そこで、すこし苦しそうにひと呼吸置いて。

「仲のいい友達は知つてゐるんだけど、初めて見られたときにそいつ

いつのつて変に見えないかなって。どう?」「つべべ

思わず吹き出してしまった。

その反応に怒ったのか、少し不機嫌そうに彼女が言つ。

「何よ、何で笑うの」

しまつた、怒らせてしまつた様だ。

いつもは堂々として、一切の負の感情がないように振舞う彼女が真剣に、しかも心底不安というような表情をしているから、なんて口が裂けても言えない。

「すいません、なんか意外だつたから」

「私に悩み事は似合わないって言いたいの?」

まずい、方向をかえなれば。

「別に、変には見えないと存りますよ。」

率直な意見を投げかけてみる。

「本当に?」

「ええ、本当に」

むしろ、テンションが高い時の彼女の方が人当たりはいいのではないかとも思う。

・・・僕は圧倒されてしまつて、少し喋りにくいけど。

「変に隠す必要ないですよ」

「そうかな?」

「は」

すこし、驚いた様な顔をして沈黙。

数秒の間が空いた後、彼女は少し視線を泳がせると、

「ありがとう」

そつーー眩しそうくらいの、弾ける笑顔で言つた。

不意に、ドクン、と心臓が大きくバウンドする。

「じゃあ、またね」

そう言つて、彼女はすいと歩いていってしまった。

「・・・あ」

その後ろ姿をボーッと見ていると、少しづつ鼓動が収まつていくのが分かる。

だが、それは消える事なく胸の奥で響き続けていた。

・・・今日は少し喋りすぎたかもしない。

僕たちはやけに饒舌だった。

僕はあまり喋るのが得意ではないから、こういうのはたまにいい。

未だやむ気配のない鼓動と、それに乗じてあがつてきた体温を抑えるようにサイダーを飲む。

「ん・・・「クッ」

また、もう少し、この味が好きになつた気がした。

・・・鼓動が、治まらない。

それに危険性を感じ始めたのは、その日夜中のことだった。

小さく、ゆっくりとではあるが、脈打ち始めたそれは止まるところを知らない。

夕飯を食べた時も、風呂に入つた時も、何をしていても胸の奥に居座り続ける。

時刻は午前一時。

さつきから異常に喉が渴く、水が欲しい。

這うような格好で自室から出ると、一階の台所までやつと辿り着く。母の性格からか隅々まで磨き上げられたシンクは月明かりを綺麗に反射し、鈍い銀色に光っている。

その光に若干顔を歪めつつ、蛇口を捻り水を飲む。ゴクゴクと音を立てながら、体に水を流し込むと、少しづつ体が楽になつていいくのが分かる。

「・・・! はあ・・・」

思わず呼吸する事を忘れていたらしく、肺が苦しい。

ぜえぜえと荒い呼吸を繰り返しやつと落ち着いてきた頃、気づいた。鼓動が治まっている。

おかしなものだなと少し笑つてしまいそうになる。

まあ、取り敢えず治まつたのだから喜ぶべきなのであらう。

ホッと胸をなでおろすと、安堵感に包まれる。

よし、大丈夫だ。

頭のてっぺんからつま先まで異変はないか探るが、特にない。

「良かつた、な」

思わず口に出してしまつたが、何時間も治まらなかつたわけだから仕方ない。

急に体が軽く、楽になつてこむと意識が既に薄れていくのを感じる。

ふらふらと階段を上り、自室のベッドに倒れこむと意識が既に薄れていくのを感じる。

独特の浮遊感に包まれながら、頭を振り絞つて考えた。

原因は分かっている。

恐らく彼女の事だらう。

今まで心の中で否定してきたが、もう認めるしかないのかもしけない。

そこまで考えたところで、意識がブラックアウトしていく。

眠りに落ちる最中、僕はひとつ推論を導き出した。

――これが、恋、なのかな？

今日も、暑い。

学校へと続く一本道は、今日もたくさんの生徒で溢れかえっている。加えて、というかこちらの理由の方が大きいのだが、今日の最高気温は昨日を一度上回つて36度らしい。

あまりに暑すぎて、来週辺りには通学途中に溶けて無くなってしまうのではないかと半ば本気で考えてしまう程だ。

夏の強い日差しと、その照り返しでキラキラと光る一本道。

その先に見える学校がとても遠く感じられる。

今日もこの道を歩かなければいけないのかと思い、うんざりしていた時のことだった。

「よう、久しぶり」

たらたらと歩く僕の右脇から聞こえた声の主に、僕は見覚えがあった。

去年、同じクラスだった男だ。

学校指定のジャージを着ている所を見ると、運動部に所属しているらしい。

確かに野球部だったと記憶している。

最も、彼が坊主でなければ思い出す事もなかつたかもしれないが。クラスでの関わりは少なく、会話を交わした事なんて全くといっていい程なかつた筈だ。

そんな彼が僕に話しかけている事に疑問を感じていると、おもむろに彼が口を開く。

「」の頃、たまに見かけるけどなんかいい事でもあつたか？」

トン、と軽く小突かれたような衝撃を受ける。

確かに、ここ最近僕には変化があつた。

それは僕にとって数少ない人との繋がりであつたし、楽しいとも感じていた。

しかし、その変化が普段の生活にまで影響しているというのは信じられない。

僕はそこまで感情が顔にでてしまうタイプなのだろうか。

「何故？」

「いや、なんか前よか明るい感じがする。前は死んだ魚みたいな目、してたからな」

死んだ魚とは酷い言われ様だと若干憤慨しつつも、あまり悪い気はしない。

「じゃなー」

そう言つと彼は足早に人ごみの間をすり抜け、見えなくなってしまった

つた。

明るい感じ、か。

あまり面識の無い人でさえも、僕の変化は感じ取れたのだろう。  
とても大きな変化だったのかもしない、と考える。

それと同時に、今までの自分を変化させた原因であろう彼女が思い浮かぶ。

全く、僕はどうしてしまったのだろうか。

軽い苦笑と共に、深く息を吐ぐ。

不思議と、爽やかな気分だ。

さあ、今日も一日頑張ろうか、等と柄にも無い事を考えつつ、学校に足を向けて。

一步、踏み出した。

勿論、あの場所へ行く為だ。

登校時よりも強い日差しと熱気を受けつつ、山道を登つていいく。太陽の光の反射でギラギラと光るアスファルトを薄く睨みつつ、ガードレールの先にある森が作った日陰を歩く。  
ふと足元をみると、影がやけに短く感じられる。

それ程までに太陽が高い位置まで昇っているのだろう。

日陰に入ると暑さもかなり和らぐが、それでも暑い。

頭皮から汗が滲んでくるのが鮮明に感じられ、心の中で舌打ちする。左手に持つ学生鞄がやけに重く感じられる。

暑さのせいだろうか、頭が上手く回っている気がせずに、無心で坂を上っていく。

ガードレールの先に広がる木々が道路を作る日陰は予想より短く、暑さは緩和できそうに無い。

Yシャツの背中がしつとりと湿つてベタつく汗の感触に嫌気が差し始めた頃、僕はベンチに辿り着いた。

ベンチの右端へゆっくつと腰掛ける。

暫く、街を眺めていると、背後から彼女の声が聞こえた。

「やあ、少年」

「こんなにちは、今日も暑いですね」

僕は会話 자체得意な方ではないので、いつも第一声はこれになってしまっている。

実際暑いので、ついつい口にしてしまつ。

こういう時、もう少しバリエーションがあればなと思う。最も、彼女と話す機会が増えたからは、少しほん話への苦手意識も薄ってきた。

「はい、どうぞ」

不意に、彼女の左手が僕に差し出される。

その手は、サイダーの缶を握っていた。

驚いた、いつの間に買つていたんだろう。

大方、僕がボーッとしていて気づかなかつたのではないかと思つたが。

「ありがとうございます」

もつ5回田ぐらいとなるが、彼女からサイダーを受け取る。

早速一口飲むと、暑さのせいもおおいにあるが、美味しく感じられる。

そして、彼女との雑談が始まる。

会話の内容は大体二コース関連が多い。

性別や年齢も違うので共通の話題が事のほか少ないのは仕方ない。

今日は、この頃話題になつてゐる通り魔の話だ。

どこにでもある内容だが、彼女と話していると興味深いものに思えてくるから不思議だ。

そして、15分程話していると、彼女がサイダーを飲み終わり、缶を手の中で弄んでいるのが分かる。

これが、僕たちが解散する合図というか日安みたいなものだ。

「本当に暑いね」

彼女が少し疲れたような顔で言つ。

「ですね」

「でも、私の学校は明日から夏休みなんだ。」

「僕のところもですよ」

そう、明日からは夏休みなのだ。

今日の帰りの号令でが終わった瞬間クラスの大半が騒いでいたのを覚えている。

・・・夏休み、か。

一般的な学生にとつて夏休みというのは嬉しいものなのかも知れないが、僕にとつてはそうでもない。

授業という暇つぶしが無くなるので暇を持て余してしまい、時間を浪費している感覚に取り付かれてしまう。

しかも、夏休みに入るということは僕と彼女が会う機会が無くなることを意味している。

折角手にした、僕が変われるチャンスだと思つ。

彼女に抱いた感情もまだ失いたくはない。

それに、今日の朝野球部の彼に言われた一言で確信した。  
僕は変化している。

それもいい方向へ向かっている。

だから、僕のは一つの決心を抱えていた。

今日、授業中にずっと考えていた言葉を今言おう。

別に付き合つてくださいとかそういうものではないし、決心の要るような台詞には聞こえないかもしない。

それでも僕にとつてはとても重要で、これを言つことが出来れば大きく変われるような気がした。

深く深呼吸をすると、視線を彼女へと向ける。  
そして僕は、口を開いた。

「あの「あのね、少年」」

だが、それは彼女に遮られてしまった。

そして彼女は、嬉しさと恥ずかしさが入り混じったような顔で言つ。

「私ね、好きな人が居たの。クラスメイトで少しほお喋りしてたんだけど、私の静かなイメージが定着していて、それが崩れたら嫌われるかもって不安だつた…でも、君に相談して勇気が出て、昨日告白したの」

視界が・・・揺れる。

何故？急に？どうして？

疑問符で頭が埋め尽くされ、頭は回りそうも無い。

上下に、左右にぐらつく視界をなんとか建て直すが体に力が入らず、咄嗟にベンチに手を書け体制を整える。

なんとか、彼女の声は拾うことが出来た。

「それでね、OK貰ったの！」

彼女は嬉々として、それを話している。

どうすればいい？

何か言わなきや何か言わなきや 何か言わなきや。

けど、口は開いても声を発する事ができない。

「そう、で、すか」

震えた声だはあつたが、何とか声を絞り出す。

それが、限界だった。

「それで、その・・・」

彼女の声音が沈むのが分かる。

そして、一の句の内容は大体予想がついた。

嫌だ、聞きたくない。

「もう、ここに来るのは」

嫌だ嫌だイヤダイヤダイやだ。

もう何も考えられず、むき出しの感情が体の中から外へ溢れ出ことを押しとどめるので精一杯だ。

彼女は、それを告げるのに一瞬ためらう。

その一瞬が、永遠のように感じられた。

どうしよう、どうすれば、嫌だ、考えなくちゃ、何を。

そんな僕の思考が落ち着くはずもなく時間切れとなつた。

彼女ははつきりと、僕に告げる。

「終わりにしようと思うの」

・・・僕は、何も言つことが出来なかつた。

彼女はくるりと踵を返すと、片で風を切るように颯爽と歩いて行く。

僕はやはり、その後ろ姿を黙つて見送るしかない。

100m程歩いたところで、突然彼女がこちらに振り向く。

彼女は、少しだけ寂しげな微笑みを浮かべていた。

「少年、じゃあね」

そうして、僕の非日常は、幕を閉じた。

「何やつてんだか、僕は」

夕暮れに染まりゆく街をただひたすらに眺めながら苦笑する。

僕は、今の僕自身の心境に驚いている。

まさか、こんなに落ち込むとは思つてもなかつた。

言葉では形容できない暗い感情が、体を支配している。

全く僕はどれだけ惨めなのだろうか、逆に笑いすら込み上げてしまう。

勝手に一人で悩んで、勝手に一人で落ち込んで、馬鹿みたいだな。結局、お互いの名前すら知らなかつたじゃないか。

僕が大切だと思っていた非日常も彼女にとつては些細なことだつたのかもしれない。

そう思うと悲しさが一層強く込み上げてくる。

・・・だけど。

今、悲しいと思っていることが。

悲しいと、そう思えることが。

何故だか無性に嬉しいと考えている自分がいる。

今までにこんなに強い感情を抱いたことはただの一度もなかつた。何事にも執着できず冷めた考え方しか持てなかつた、嫌いだった昔の自分はいつの間にか、悲しみや嬉しさを十分に感じられる様な人間

になれている。

この一週間と少しの出来事は確かに僕の存在に変化を促した。

だが、彼女との関係は綺麗サッパリ無くなってしまったし、惨めな男子中学生が無理やり前向きに考えようとしているだけかもしれない。

しかし、まだまだ精神的にも未熟な僕にはどれが正解なのかは分からぬ。

それに、何も今考える必要性はないと思つ。

だから、今日はもう帰ろう。

ふと、左手に持っているサイダーがまだ残っていることに気がつく。

僕は、それを一気に飲み干した。

「ん、こくつ

炭酸の抜けきったそれは飲めるようなものではなく、  
・・・少し、ショッパかった。

終

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8303m/>

---

サイダー

2010年10月28日00時52分発行